本稿に對する 早速の反響

處が 先生のやうな方々、レイメンと 申上ぐべきのでせうか、宗教界の 當局者以外の かたゞ、例へば 只今 私に思ひ出されるのは 長尾半平樣ですが、あの方や、先生や、其他さういふグループの かたがたの おはなしは 紋切形に なつてゐないので、聞き手の方は どこへ 引張られてゆくのか 一向見込がつきません、その方角の 見當が 一すつきません。が、それにも係らず、おはなし振りに 新しい味があつて、聞きとれて ゐるうちに、意外の處へ 案内されてゆきます。しかも その結論に來ると 成程さうである、さうなくてはならぬと うなづかせられます。そこを 私等は うれしく感じます。

私は平常 思つてゐます。今日の社會が 要求してゐるのは やはり かやうなおはなし——レイメンとしての 立場から お考へになり、また 御研究になつた 題目、即ち 私等普通人の 宗教生活に 起りやすい題目に對する おはなしでは ありますまいか。一般世人の聞きたがるのは 宗教界當局者の 型にはまつた、或は 一部專門家の 紋切形のおはなしよりも、自分等の 日常生活にありがちの苦心や苦勞の 一人前を 十分に背負ひ込んで、そして その間から常に クリスチヤンとして 切り拔けて 行かれる方々の おはなしでは ありますまいか。この感じは 私一人に 限つた事ではなくて、一般世間に 共通の事實で あるやうに 私には觀察されます。……

あとことば

本書第一章の 拙稿に對して、同章末 並に 本卷末 列記のかたがた——その數に於て あのやうに多く、また その立場に於て あのやうに違つた かたがたから、いたゞいたのが 早速の反響である。これは 私にとつて、眞に意外の 吉報、また 豫想外の 奬勵であります。第二章以下の 諸稿に對しても、其等が 種々の機關を通じて まづ公にされた當時、かれこれ うれしい お言葉に接しました。しかし 其等の拙稿を 後に集めて 一卷とするといふ 思立ちが 其頃なかつたので、其等の通信は もはや一つも 手許にのこつてゐません。たゞ「日光の 續く 限りは」が 一二の教會機關に 掲げられた後、間もなく 一二三、先進者の 御慫慂をうけて 私は この集の公刊を 思ひ附きました。それで 此等の反響を 以上の通り 列記させていたゞくのは 私にとつて 一の大きな 仕合せであります。此等の御推奬を 賜はつた かたがたに對して、茲に略儀ながら 右御禮申上ます。

同時に 此等の反響は 我社會最近の 進運一面の 消息を強く 傳ふるものとして、私には 一

つの喜ばしい おとづれであります。明治元年から 數へると、我社會もまた もはや還曆線を通り越してゐます。自然の 成熟作用で、Weekday Christians（これは 本書のまへことば中に出てゐる Sunday Christians の對比として、玆に便宜上 使つてみる言葉ですが）が 我々の間にも 今後ますます ふへてゆくでせう。一方に於て 現在 それ等になりたいと 衷心にこひ願つてゐられ、また それぞれの 社會的立場に於て 實際さうありたいと 苦心してゐられる人人が 隨分數多く あられませう。他方 我邦現今の 狀勢から見ても、この階級が 優勢になつてゆくべき必要が 日毎にまして ゆきつゝあります。これは 今更に 云ふまでもありません。此等內外の 兩側面 ―― 國家的と個人的との 兩側面から 壓し出されて來る この必要は 必ずや 天佑の下に 滿たされるでありませう。

かやうにして、無名、無數、また 無量のバン種が 我邦の社會を 全體的に ふつくりと ふくらませて くれるでありませう。また かやうにして、我同胞國民の救が 徐々にせよ、漸次に完成に 向はせられて ゆくでありませう。といふ信仰が 幸にも 私等に 與へられます。此等同信の ―― 現在 並に 將來の ―― かたがたに、この小い 第一集を さゝげます。

本書の まへことば中に 一寸記して 置きましたが、この第一集に 揭ぐる感想文は 孰れも今回新たに 全部の改訂を 經たもので、此等が その原形に於て 公けにされた年月は 左の通りであります。此等の年月を 玆に揭げて 本書が決して 舊稿再錄集ではない事を 明かにして置きます。

一、「日光の 續く 限りは」　昭和七年八月四日　福音新報
二、葡萄樹の 散髮　同 年八月廿一日　大森教會月報
三、線 また 線　昭和六年九月號　家庭
四、とこよ不滅の 光明遍照　昭和四年十一月　福音新報
五、耶蘇公生涯の 最初一年　昭和六年六月十七―八日　北越新報　同 年七月十五日　大阪每日新聞
六、神か、己か、どつちか、　昭和六年六月四日　福音新報
七、信仰の 內壓力　昭和六年四月十四日―五日　北越新報　同 年十二月二十日　大森教會月報
八、パウロの パラカローン　昭和五年六月二十六日　福音新報
九、天杯拜受を ことぶきて　昭和七年七月　大森教會月報　同 年七月　世之光
十、グループ メソツドによる 聖書の讀み方（其一）　昭和四年二月　大森教會月報　同 年三月　基督教世界
十一、大正十三年十一月　日曜學校

あとことば
十一、グループ メソッドによる 聖書の讀み方（其二） 大正十四年三月 日曜學校
十二、老友のための 祈り 昭和六年五月二十日 大森教會月報
十三、「主よ みもとに 近づかん」 大正四年四月 婦人之友

昭和七年十一月七日印刷
昭和七年十一月十一日發行

定價四十錢

著者 浦口文治
發行者 東京市京橋區木挽町五丁目四番地 株式會社警醒社代表者 福永文之助
印刷者 東京市王子區堀船町一丁目八百三十五番地 折坂友之
印刷所 東京市王子區堀船町一丁目八百三十五番地 星光印刷社

不許複製

發行所 東京市京橋區木挽橋東詰 振替東京五五三番 警醒社

浦口文治先生著

新評註 ハムレット Shakespeare's Hamlet as seen by the Elizbethan Audience

著者二十ケ年間研鑽の收獲、最近三ケ年間推敲の力作、この世界的最大悲劇に對する從來の偏見謬想を排して、エリザ朝觀劇者等の眼に映じた儘のハムレットの健氣な青年的性格を明示したるもの、所載の新評註は新圖表と相映じて書中の双美。

菊版三百十二頁 圖表寫眞畫ツキ 定價二圓五十錢 三省堂

ジアン ラスキン

藝術評論家として、經濟思想家として、また社會改造の實際家として、名實俱に世界人たるラスキンの一代大觀、材料豐富、秩序整頓、用意周到、記述懇切、蓋し本邦に於けるラスキン評論中の白眉、所載の圖表類またラスキン研究家坐右の好伴侶。

四六版 六百頁 定價三圓二十錢 同文館

グループ メソッド — 外國文學研究の近道

外國文はいかに讀むべきか、いかに解すべきか、いかに譯すべきか。その正しきメソッドに對する著者獨得の主張を詳述し、加ふるにこのメソッド運用の妙を諸種多樣の實例文によつて證明したるもの。一躍三版を重ねたる好著。

四六版三六二頁 定價二圓八十錢 文化生活研究會

グループ式譯し方

前著の新主張が忽ち世に認められると俱に、起つて來たその要望に應じて、中等程度の外國語學研究者のために此式の要領と應用とを一層平明かつ卑近に說明したるもの。

四六判三五五頁 定價一圓八十錢 同文館

實務社交譯 評對註 **現用英語 英詩の栞** 北文館

東京堂

ホワード・エッチ・ブリントン 岩橋武夫共著 **創造的禮拜** 定價八十錢 送料八錢

神學博士 館岡剛著 **基督教會史** 定價二圓 送料十四錢

ジエイ・ロバトスン博士著 福田君子譯 秘められたる新約聖書 ロマンス 定價一圓三十錢 送料十錢

ダン・ボウリング著 米澤尙三譯 小說 **渦卷く波止場** 定價八十錢 送料八錢

別所梅之助著 **石を積む** 定價一圓八十錢 送料十二錢

安部清藏著 **實生活途上の基督** 定價一圓五十錢 送料十四錢

ケー・エフ・メイケ著 高垣勤次郎譯 **神を搜索する科學** 定價五十錢 送料四錢

徳永規矩著 **逆境の恩寵** 定價七十錢 送料六錢

目錄贈呈

東京市京橋區木挽町五ノ四 警醒社 振替東京五五三番

賀川豐彦名著普及版

神に依る解放	四六版 二三〇頁	定價三十五錢	送料四錢
イエスの宗教と其眞理	四六判 二八〇頁	定價三十五錢	送料四錢
イエスと人類の内容	四六判 三一〇頁	定價三十五錢	送料四錢
苦難に對する態度	四六判 二〇四頁	定價三十五錢	送料四錢
人間として見たる使徒パーロ	四六判 三〇〇頁	定價三十五錢	送料四錢
イエスと自然の默示	四六判 二四〇頁	定價三十五錢	送料四錢
人類への宣言	四六判 五三〇頁	定價一圓二錢	送料十二錢

東京・京橋・木挽橋東詰

警醒社

振替東京五五三番

終

株式會社 警醒社